

いんば沼

《第25号》



小谷流谷津

***** Contents

- 印旛沼環境基金20年を振り返って…白鳥孝治
- 印旛沼を翔る鳥たち…小倉正一
- 印旛沼の水質浄化にあたって…藤村葉子
—浄化槽の重要性—

財団法人 印旛沼環境基金
<http://village.infoweb.ne.jp/~imbanuma/>

印旛沼環境基金 20年を振り返って

白鳥 孝治

(元財団法人印旛沼環境基金 主任水質研究員)

どんな会社でも、創設当初の方針がしっかりしている会社は永く栄える、という。(財)印旛沼環境基金(以下、基金と称す)が設立してから早や20年になる機会に、設立当初の方針を思い出し、将来への参考にした。

1 出発点の発想

印旛沼は、昔から印旛地域のシンボルであった。その印旛沼の水質は、基金設立以前から、全国湖沼ワースト2位、若しくは3位という汚名を着せられていた。このような状況の中で流域住民にとって、印旛沼は、かつてのように「何とかシンボルにふさわしい沼にしたい」という願いがあった。

しかし、そのための具体的な行動を起こそうとすると、印旛沼に隣接する地域と、そうでない地域、いわゆる流入河川の上流に当たる地域とでは、沼に対する感覚に若干異なるものがあった。このような中で、印旛沼の水質環境を改善するためには、これを一つにして大同団結することが不可欠であり、またそのための拠点作りがどうしても必要であった。そして印旛地域の指導者たちは、その具体案として、(財)印旛沼環境基金の設立に努力されたと聞いている。

2 活動方針が決まるまで

一般的な風潮として、確かに、印旛沼との係わり方が直接か、間接的かの度合いによって、感覚的な相違があるだろうし、また水の環境保全を目指す個人や民間団体は、往々にして個性を主張しがちである。これらが一つにまとまるためには、それぞれの立場や主張をよく吟味し、印旛沼の浄化に向けて、互いに納得できる線を求めなければならない。そのためには、基金は、研究機関としてではなく、もっぱら住民対象の情報収集、相談、協議の場に徹し、水や環境に関する最新の情報を住民に提供することが求められている。しかし、このような性格をもった機関は、日本中どこにも見当たらず、新しく創るしかなかった。

そこで、基金は、「将来を見通して、間違いのない基金の活動はどうあるべきか」という方針について、有

識者に一般公開の場で討論していただき、それを印旛地域全体の共通認識としたい」という願いをもって、昭和60年8月、日本を代表する有識者による「印旛沼シンポジウム」が開催された。お招きした演者は、

- ・沼田真(日本生態学会会長、日本植物学会会長)
- ・山根靖弘(日本薬学会副会長、千葉大学環境科学研究機構委員長)
- ・市原実(国際第四紀連合アジア・太平洋地域第四紀層序委員会委員長)
- ・川喜田二郎(KJ法創始者・秩父宮記念学術賞受賞者)
- ・藤原彰夫(日本土壌肥料学会会長・アメリカ植物学会名誉会長)

の方々である。

当日の討論で交わされたご意見をとりまとめてみると、『印旛沼とその流域について、自然的歴史的社会的背景、住民意識などを含めた地域の特性を総合的にとらえ、湖沼陸域生態系として印旛沼を把握し、行動せよ』ということであった。要するに、流域全体、その他関係するものすべてを含めて、『広く印旛沼という個性、独自性を総合化』して、問題を解明せよ、ということであり、前述した基金の『出発点の発想』を発展的に行動し、解決に向かえ、ということと理解できる。

このような貴重な意見を踏まえ、基金の活動方針として、まず個性、独自性を明らかにするため、

①住民との意見交換をする場を多く持つこと

②現場の状況を調査、掘り起こすこと

次に印旛沼水質環境の保全意識を高め、その活動を活発にするため、

③すでに活動している団体への助成

④次世代を担う若者の育成を行うこと

そして最後に、

⑤これらの情報を印刷物にして、適時、広くPRすること

とした。この五つの方針は、いずれも20年後のいまも続いている。

3 住民活動の誕生

「印旛沼シンポジウム」が終わったとき、思わぬ反響があった。その一つは、印旛沼への盛り上がり、さらに継続させようとする佐倉青年会議所の動きである。

佐倉青年会議所は、印旛沼の保全を世の人に強くアピールする出発点は、『多くの人々に沼を直接見ってもらうこと』と考え、印旛沼一周に人の輪を作り、手を結ぼうという「印旛沼フェスティバル」を企画した。そして昭和62年8月には約1.5万人を動員して、本当に人の輪ができあがった。この時、参集した全員が思わず万歳を叫んだのである。印旛沼流域全体のエネルギーの大きさには、感服するしかなかった。

その翌年度からは、印旛沼一周を楽しく歩くことに企画と替え、参加者を公募して、毎年11月3日に行うことにした。この印旛沼ウォークラリーは、子ども連れの絶好のハイキングとして好評であり、10年以上も続いた。そして当日には、当基金は、「印旛沼おもしろクイズ」を出して、歩きながら考えてもらい、最後に正解を披露して、興を添えた。

今、印旛沼周辺では、水環境に係わるボランティア活動がますます活発化し、NPO法人が誕生し、また多くのボランティア団体を束ねる印旛沼環境団体連合会が結成するまでに成長している。まことにありがたく、感無量である。

4 現地の情報収集

印旛沼流域には、古村あり、団地あり、また歴史的民俗的に異なる性格の地域がある。基金が実態に即した活動をするためには、これらの実態を正しく把握・総合化する必要があり、現地の実態調査を行った。その中から、2例ほど紹介する。

i) 河川実態調査

印旛沼流域の河川を実際に歩いてみると、その違いに驚かされた。鹿島川、高崎川上流の谷津は、至るところに湧水があり、茶碗を置いて飲めるようにしているところがあった。湧水量が多くて、歩けないほどの所があり、湧水こそ沼の水源であることを実感した。手繰川、桑納川を遡ると、上流は団地に囲まれ、ついには排水路になり、地下にもぐって暗渠になっていた。

高崎川の川辺を歩くと、地蔵様があちこちに立っていた。その土台に「女人中」と書いてあった。女人中とは、村の女性仲間の講のことであり、この地蔵様にお参りして、一日中女ばかりで食べたり、踊ったりして骨休みをするという。地蔵様は、川と人との結びつきを強く教えてくれた。

同じ川でも、人との結びつきは、地域によってこれ程の相違があった。これをみても、水質浄化は、地域住民の意識の違いをよく知って、対策を立てなければならないのである。

ii) 生活排水対策調査

家庭で行っている生活排水対策の実際を知ろうとして、女性の集まるところに出向いて聞くことにした。

公民館の料理教室でお話を聞いたところ、「料理を習いにきたのであり、排水のことは考えていない」という。いろいろ話しているうちに、「魚を下ろすときに、まな板の上に紙を敷いて、血などは流さない」などと、具体例が話題に出てきた。しかし、家庭での生活排水対策を意識的に行っている人は意外に少なく、意識の中に持ち込むことの重要性を知った。

同じ問いかけを古村で行ったところ、「私たちは、生活排水で川の水を汚していない。何百年も同じよう

に生活しているのに、川は少しも汚れなかった。川の汚れているのは団地の話でしょう」という。確かに一理がある。昔は、風呂や台所の汚れた水は、堆肥にかけて肥料として使っていたのである。

一様に見える生活排水対策も、地域の特性に合った対応が必要である。基金は、国、県などの一律な施策と地域対応との間に立って、双方の橋渡しをする役目が求められているといえる。

5 都市と古村

印旛沼流域で環境保全活動を行うときに、上述の事例で分かるように、都市住民と古村住民の感覚的相違は大きく、これを認識、理解することは何よりも重要であると思われる。前者は明文化した理論と、物質的に今の豊かさを重視する。後者は文章化し得ない無言の情や伝統と、限られた物質で持続的な豊かさを重視する。また、前者は自然を人の対象物とみて、後者は自然の中に人を見る。前者を長文の叙情詩に例えれば、後者はルールをわきまえた俳句に似ている。花一輪を見ても双方の受け止め方は異なっているのである。

江戸時代までは、都市を含めて日本中全体が古村的であった。しかし、現代の都市は、次第に様変わりしはじめている。この相違は、明治以来、西欧化してきた日本の姿を浮き彫りにするものであり、きわめて根が深く、日本、世界の未来社会にとって重要な課題である。しかもそれが印旛沼流域で隣り合っている。双方の利点をあわせ、欠点を除いたとき、本当のよき環境、よき社会が保たれると思えてならない。都市と古村の同居する印旛沼流域から、新しく、すばらしい文化が誕生することを期待してやまない。

6 多くの応援団体

基金誕生から20年を経て、今考えると、基金の業績は、印旛沼を守ろうとする多くの方々による力の結集であった。住民ボランティアの力については先に述べたとおりである。また、住民や県、市町村の協力はもとより、印旛沼漁業協同組合、印旛沼土地改良区、水資源開発公団（現独立行政法人水資源機構）の多大なる支援等々、枚挙に暇がない。特に、大学や試験研究機関、なかでも印旛沼自然生態研究会の積極的な協力は大きく、皆様の随時の助言は基金にとって不可欠であった。

平成5年に環境保全功労者として環境庁長官表彰を、平成10年に日本水環境学会から水環境文化賞を頂戴したのも、これら多くのご支援に支えられてのことである。

心から御礼申し上げるとともに、湖沼・陸域すべてに関係する人々の協力関係を、将来にわたって継続し、発展されることをご期待する次第である。

印旛沼を翔る 鳥たち

小倉 正一

(千葉県生物学会員)

1. プロローグ

印旛沼は、甚平衛大橋から遙に筑波山を望む北沼および臼井・師戸城址跡を背後に抱く西沼の二つの沼、そしてそれらの沼を結ぶ約4kmの捷水路から成り立っている。流域は10市3町2村にわたり、沼への流入河川は西沼で7河川、北沼で1河川がある。このように特異的な地形を背景に抱く2つの沼においては、自ずと鳥類にもそれぞれ異なる鳥相がみられる。また、両沼は、ともに閉鎖性が強く、水深も1.7~2mと浅く、しかも水質が著しく悪化し、近年は浮葉性植物や魚介類等の餌生物が減少、そしてこれに伴い、特に潜水採餌ガモの減少傾向がみられる。

しかしながら、一方では、沼面とその周辺は、鳥類保護区に指定されているため、カモ類などの冬鳥やシギ・チドリなどの旅鳥、カワウ・オオバン等の留鳥を中心とする独特の鳥類相とともに、サンカノゴイやオオセッカ、コジュリン等の貴重種、チュウヒをはじめとする猛禽類も多く記録されている。

ともあれ、ここ20年の間に印旛沼で記録された鳥類は全体で約190種を数える。このうち、周年生息するカイツブリ、カワウ、オオバンなどの“留鳥”は全体の19.5%を占める37種、秋に渡来して越冬するカモ類を主体とする“冬鳥”は36.8%の70種、そして春の北上と秋の南下に立ち寄るシギ・チドリ類やショウドウツバメなどの“旅鳥”は37%の66種である。ここで、“冬鳥”と“旅鳥”を数え合わせると、渡来数全体の71.5%を占める136種となり、しかもその60%はカモ・シギ類などの水鳥で占められる。まさしく、『水鳥の宝庫』そのものなのである。

これらの鳥たちが沼やその周りで繰り広げられる個々の仕草は、まさにドラマにも等しい。その一端をかいま見てみることにする。

2. 四季に翔る“来る鳥”、“去る鳥”

水ぬるむ早春にアシ原に流れるウグイスの囀さえずり、そして北に渡るシギ、チドリたちが飛び交う晩春をすぎる頃になると、愈々賑々しく鳴きわめくオオヨシキリ、次いでヒメガマに好んで営巣するヨシゴイ、サギの仲間、湖面を乱舞するコアジサシなどが夏の風物詩を彩

る。そして秋ともなれば、南に渡るシギ、チドリにサギの仲間が競うように姿をみせる。しかし、沼での圧巻は冬に群れるカモたちである。数のうえでは、マガモ、カルガモ、トコガモなどにトモエガモなどを交え、西沼に比べ北沼に偏る傾向がみられる。なかでも、冬季に集中する冬鳥のうち、特に沼の中で注目される種としては、カンムリカイツブリ、ミコアイサ、ホオジロガモ、トモエガモ、また湖畔ではハヤブサ、チュウヒ、ノスリ、ミサゴ、チョウゲンボウ、サンカノゴイ、オオセッカ、コジュリン、ツリスガラ、ベニマシコなどが挙げられよう。

3. かいまみせる華麗なる鳥たちのドラマ

■沼と周りでは……

沼の周りの田圃では、シベリアからの遠来の客であるタゲリがダークグリーンのブレザーを纏まとったサイケデリックな姿態で立ったまま地中に潜む虫を補食しようと“たたらを踏む”動作をみせる(写真1)。



写真1 水田で採餌するタゲリ

一方、沼面では、ここ印旛沼のボスの存在である“からすパン”こと、オオバンがマコモ、ヒメガマの群落から出てきてシンクロナイズドスウィミングを競う。

■アシ原では……



写真2 黄昏時、アシ原に潜むサンカノゴイ

アシ原の中からは、時にポオーウ、ポオーウと、むせび泣く船の霧笛のようにサンカノゴイのブーミングが聞こえてくる。この鳥は、いつもはアシ原に潜んでいて姿をほとんど見せることがない(写真2)。しかし、時には杉綾模様

莫塵の色合いをみせるずんぐりタイプの大きなシギで不意に眼前に飛び出してきて驚かされることもある。赤松宗旦著の「利根川図志」にでてくる「谷原イボ」とは、恐らくはこの鳥のことであろう。

アシ原の上空に目をやると、チュウヒなどの猛禽類がパトロールする姿が見られるが、北沼の一面にはチュウヒの集団罫が確認されている。彼らは、日没の概ね1時間10分ほど前から北、北東、北西の三方向から中空～低空を飛来し、20分くらい上空を巡回した後、それぞれの罫に降下する。この光景はすこぶる特異であり、一見に値する（写真3）。この罫入り行動は、日没後30分位までに完了する。



写真3 夕暮れ時、低空から罫入りするチュウヒ

日没間際の10分ほどの間は、オオジュリンやヒバリなどの群が続々と飛来し、チュウヒの集団罫の外縁部に飛び込むような情景は興味津々、目を見張るものがある。また、夜の帳が下りるこの時間帯は、アシ原でネズミを補食しようとダッチロールするコミミズクや、アブラコウモリを追うチョウゲンボウもみられ、時の過ぎるのを忘れる。また、この黄昏（たそがれ）時に、北の彼方から奇怪な大群で飛来するムクドリが、突如として竜巻状から真っ黒な塊になって、恐怖を覚える羽音もろともアシ原に落下するダイナミックな罫入りも一驚である。

一方、ここアシ原には、スズメぐらいの大きさでジュピ、ジュピと囀りながら、尾を垂らして飛ぶオオセッカも生息している。この鳥は、梅雨開けての盛夏の頃になっても、なお繁殖行動をみせ、8月も産卵するという妙な貴重種である。このオオセッカとともに、空高くヒッ、ヒッと鳴きながら舞い上がり、そしてチャッ、チャッとアルト声で弧を描きながら舞い降りてくる小さなセッカ、ベレー帽をかぶったようなコジュリン、見事なソプラノで囀るコヨシキリも姿をみせる。また、オオジュリンやツリスガラがアシの葉鞘を嘴で剥がしながら、中に潜む白っぽいピワコカラカイガラムシをつまみ出している仕草にも目を引かれる。

・アシ原から遙な斜面林では……

この斜面林の一角には、以前、数千羽を越える

“Crow・マンション”とも呼んでも可笑しくないカラスの集団罫もあった。ここでは、ハシボソガラスとハシブトガラスの両種が何ら言い争うこともなく、仲睦まじく罫をとるベッドタウンなのである。そして明るく早朝には、彼らは整然たる黒装束の軍団よろしく、鹿島川沿いに土気方面に向かう“カラス道”に流れるようなマスケームを展開する。そして未明の朝まだき、妖怪な鳴き声を交わしながら夜の活動から帰ってくるゴイサギらを迎えるカモや、アシ原の鳥たちの活気溢れる羽ばたきが夜明けの朝を告げるのである。

4. 沼・周辺で圧倒なシギ・チドリ類

沼周辺で越冬し、そして春秋の渡り期に見せる圧倒なシギ・チドリの仲間こそ、何はともあれ印旛沼の四季折々の風物である。沼周辺で視認されたシギ・チドリ類を羅列してみると…

・12月～2月の越冬期

ケリ、タゲリ、イソシギ、コチドリ、シロチドリ、ハマシギ、タシギ、クサシギ

・4月～5月の春の渡り期

タマシギ、コチドリ、シロチドリ、ムナグロ、キョウジョシギ、ウズラシギ、ハマシギ、エリマキシギ、ツルシギ、アオアシシギ、タカブシギ、イソシギ、チュウシャクシギ、タシギ、ケリ、トウネン、ヒバリシギ、オオジシギ、アカエリヒレアシシギ、サルハマシギ、コアオアシシギ、キアシシギ

・8月～10月の渡り期

コチドリ、イカルチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、トウネン、ヒバリシギ、コオバシギ、オバシギ、アオアシシギ、クサシギ、タカブシギ、キアシシギ、イソシギ、ソリハシシギ、オオソリハシシギ、タシギ、タマシギ、サルハマシギ、コアオアシシギ、オグロシギ、オオジシギ、タゲリ、アメリカウズラシギ、ウズラシギ、セイタカシギ、エリマキシギなどである。

なお、ここで、特にサギ類は季節ごとに各種が朝・昼・夜の時間帯別にそれぞれ異なるエリア・ゾーンをもち、活発な行動をみせる早朝の時間帯は注目に値する。しかし、一方では、最近の乾田化による餌生物の衰退に起因するのかどうかは明らかでないが、コサギの減少傾向は、特に憂慮される。

5. エピローグ

印旛沼には、その静に淀んだ水の色にも、風にそよぐアシ原も季節の移ろいを語る独特の風趣がある。しかし、なかでも四季を翔る鳥たちこそは、季節を間違えることなく道案内をしてくれる愛すべき《生・き・も・の・た・ち》であろう。

印旛沼の浄化にむけて

—浄化槽の役割—

藤村 葉子

(千葉県環境研究センター水質地質部)

1 はじめに

平成12年度版「千葉県環境白書」によると、印旛沼流域で発生する汚濁負荷量はCODでみると、その43%が生活系に起因するといわれる。この割合は、印旛沼に隣接する手賀沼流域（64%）に比べ小さいものの、生活系由来の汚濁負荷が印旛沼においても大きな比率を占めていることを示している（図1）。そして生活排水のうち、特に未処理で放流される生活雑排水（台所、洗濯、風呂等からの排水）による汚濁負荷の割合は高く、水を汚す大きな要因を担っている。

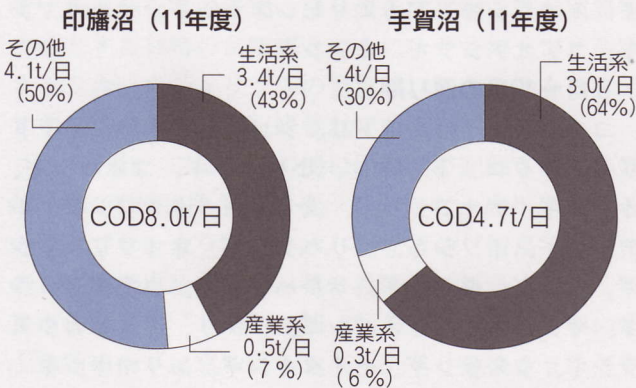


図1 印旛沼・手賀沼の発生源別汚濁負荷量 (COD)

2 生活排水処理の種類と合併処理浄化槽

生活排水の処理方式としては、下水道（流域下水道・公共下水道）、コミュニティープラント（中・大型合併処理浄化槽）、合併処理浄化槽（小規模：5～10人槽）、単独処理浄化槽（平成13年4月1日以降設置禁止）、くみ取り等がある（表1）。このうち、下水道、コミュニティープラントおよび合併処理浄化槽はし尿と、台所および洗濯の排水等の生活雑排水を含む、いわゆる生活由来のすべての排水を処理するが、単独処理浄化槽およびくみ取りではし尿のみの処理となり、生活雑排水は処理されずに放流されるため、水質の大きな汚濁源となっている。

表1 生活排水処理の種類

| | 特徴等 |
|----------------------------------|---|
| 下水道 (流域下水道・ 公共下水道) | <ul style="list-style-type: none"> 官渠の敷設に時間と費用がかかる。 各戸に処理施設の敷地が要らない。 各戸で処理施設の管理の必要がない。 大都市、中都市に敷設されている。 |
| コミュニティープラ ント(中・大型合 併処理浄化槽) | <ul style="list-style-type: none"> 一人当たりの排水処理にかかる費用が小さい。 地区ごとに中規模の処理施設が必要。 各戸で処理施設の管理の必要がない。 |
| 合併処理浄化槽(小 規模・5～10人槽) | <ul style="list-style-type: none"> 一人当たりの排水処理にかかる費用が小さい(特に設備費)。 各戸に処理施設の敷地が必要になる。 各戸で処理施設を管理する。 |
| 単独処理浄化槽 | <ul style="list-style-type: none"> し尿のみを処理して放流する。 雑排水が未処理放流となる。 平成12年から設置が禁止となった。 |
| くみ取り | <ul style="list-style-type: none"> し尿はバキュームカーでし尿処理場に搬出される。 雑排水が未処理放流となる。 トイレの水洗化ができない。 |

下水道は各戸に処理施設の敷地を要しないことや各戸で処理施設の管理の必要がない等の利点があり、都市部では普及率が高い。しかし、管渠の敷設に長い時間と大きな費用が掛かるという欠点がある。現在（平成13年度）、印旛沼流域での下水道普及率は7割程度であるが、今後、この率が急速に増加する可能性は小さいといえる。このような状況からしてみると、未処理の生活雑排水対策としての合併処理浄化槽の普及は極めて重要となる。

平成12年6月に「浄化槽法」が一部改正され、単独処理浄化槽の新設は禁止された。そして、その後の新設は合併処理浄化槽のみとなっている。しかし、一方では、既に設置されている単独処理浄化槽の基数は多く、印旛沼流域では単独処理浄化槽による処理人口は合併処理浄化槽に比べ1.2倍となっている。これは手賀沼流域における2.7倍（平成13年現在）に比べ少ないが、単独処理浄化槽に関連した未処理で放流される生活雑排水の問題は早急な解決が難しいといえる。

3 生活排水処理のしくみ

生活排水の主要な処理形態は生物処理方式であるが、これは種々の微生物が汚水中の汚れ（有機物）を二酸化炭素等に生物分解し、最終的に汚泥（主に微生物の集まり）として槽内に残るというものである。その処理のしくみは下記のようにまとめられる（図2に例を示す）。

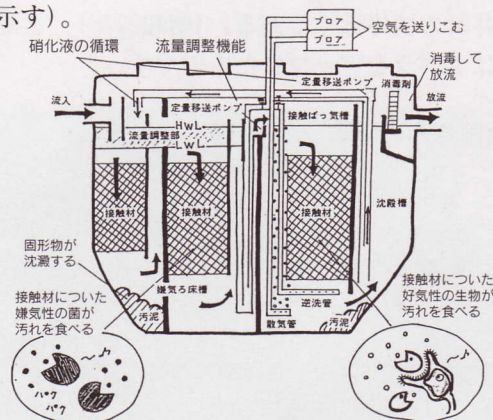


図2 高度処理型合併処理浄化槽のしくみ

3.1 合併処理浄化槽の主な処理工程

流入（生活排水） ⇒ 嫌気ろ床による嫌気性処理（1室・2室） ⇒ 接触ばっ気槽による好気性処理 ⇒ 沈殿槽 ⇒ 上澄み水 ⇒ 消毒 ⇒ 放流（処理水）

3.2 処理工程の個々における機能

- ・ 沈殿分離：固形物と上澄み水を分ける
- ・ 嫌気性処理：酸素を必要としない生物処理
- ・ 好気性処理：ブロワーによるばっ気を必要とする生物処理
- ・ 消毒：次亜塩素酸カルシウム等の錠剤を用いて処理水中の病原性微生物を殺滅

4 高度処理型合併処理浄化槽の特徴

合併処理浄化槽には、幾つかの種類と型があるが、中でも、図2に例として示した高度処理型といわれる合併処理浄化槽の普及は、今後とも大いに期待されている。この型の主な特徴としては、以下の長所がある。

- ・ 流量調整機能によってピークカット等が行われるため、有機物の除去が安定化する。
- ・ 定量移送ポンプによる硝化液の循環により窒素除

去が可能となる。

このため放流水の水質は従来の合併処理浄化槽のみならず、下水道の処理水質にも劣らないほど良好となる（BOD：15mg/以下、全窒素：15mg/以下）。

しかしながら、一方では短所として、浄化槽の仕様が従来の合併処理浄化槽の同一人槽に比べ一回り大きく、価格も高いため、補助金等の上乗せがない限り、一般に普及していくのは困難であると思われる。また、現在、家庭用として普及している高度処理型の除去は、主としてBODおよび窒素を対象としたものであり、りん除去については1社のメーカーから販売されているもののみで、千葉県ではほとんど普及していない（H.14年9月現在）。

5 大切な維持管理

生活排水処理に威力を発揮する合併処理浄化槽であったとしても、適正な維持管理をしない限り、その機能は発揮できない。

合併処理浄化槽を設置した場合には、定期的に処理水の検査を受け、正常に機能が働いているかどうかをチェックすることが法的に義務づけられている（7条検査・11条検査）。また、知事登録をした保守点検業者に年3～4回の保守・点検と、市町村の許可を受けた業者に年1回程度の清掃（バキューム車による汚泥の引き抜き）を依頼して、適切な維持管理をしなければならない。

これらの維持管理は単独処理浄化槽についても義務づけられているが、現実にはあまり実施されていない場合が多い。

6 おわりに

印旛沼の浄化において生活排水処理は重要であり、合併処理浄化槽の担う役割は大きい。今後は印旛沼流域において、BODおよび窒素の除去に加え、りん除去機能を有した高度処理型の家庭用合併処理浄化槽の開発および普及、そして単独槽から合併槽への切り替えを推進するための補助金制度等をさらに充実していくことが期待される。そして併せて、浄化槽の適切な維持管理がいかに大切かを浄化槽設置者に理解していただくことも、一段と重要なことであると考えられる。

■■■表紙の写真■■■

八街市南部にある「小谷流谷津」の光景です。

谷津は、湧水が多く、昔から谷津田として稲作に利用され、印旛沼流域の至るところにみられ、自然の宝庫と同時に、印旛沼の貴重な水源です。みんなで大切にしましょう。

川島俊彦写真集

【印旛沼 シリーズ】



当環境基金編集・発行の雑誌「いんば沼」の先号（第24号）で、“印旛沼の思い出”という題で投稿していただいた印旛 広域事務局長藤崎健彦氏の文章の中に、『当時の記憶ですが、大佐倉には印旛沼に繋がる大きな池が2つあり、その周辺には大きなポプラが何本か植えられていました。そして…』の文があります。

この一文をみて、酒々井町在住の川島俊彦さんはあまりの懐かしさに自分で撮り、大事にファイルしてあったかつての印旛沼周辺の写真集を持参し、私どもの事務所を訪れてくれた。その中の一枚に、昭和27年に

撮影したという大佐倉のポプラの写真がありました。藤崎氏は、この写真をみた途端、「まさに、これだ…」の一言でした。

上段の写真は、川島俊彦氏の説明文から…

「改良前の印旛沼で旧酒々井中学校の裏手から佐倉市浜宿方面を臨んだものである。対岸は印旛村平賀方面である。中央に見える木立はポプラであり、佐倉市と酒々井町の境界近くである」（昭和27年）、また下段の写真はポプラをアップしたものです。

【川島俊彦さんのプロフィール】

略歴：

- ・1934年 酒々井町に生まれる
- ・1947年 独学にて写真を学ぶ
- ・現在 全日本写真連盟会員・NPO法人国際美術協会会員等

主な作品：

- ・1980年 毎日グラフ「フォトユーモア」掲載
- ・1991年 全日本写真連盟千葉県本部入選
- ・1991年 酒々井町制施行100周年コンテスト（最優秀賞）
- ・1996年 印西町教育委員長賞（優良賞）
- ・2003年 千葉県社会保健協会（特選）
- その他、入賞、入選多数

編集後記

雑誌「いんば沼」を読んだよと言って、思いもかけなく、川島さんが、かつての印旛沼および周辺を撮った貴重な写真集を携えて、私どもを訪れてくれた。本当に有り難いことです。

と同時に、当基金が編集・発行している雑誌が多くの人に読んで貰っているんだなあ…、とつくづくうれしく思う。いつものことではあるが、雑誌発行の時期が近づくと、何となく憂鬱の日々であった。誰が、どこで、読んでくれるのか…、と思いつつながら。しかし、今は違う。もっと、もっと皆さんに喜んで読んで貰える雑誌にしたいと、何か燃えるものがある。

人間、何よりも、ちょっとしたきっかけだと思う。今後とも、よろしくご愛読のほどお願いいたします。

(K.M 記)

編集・発行：財団法人 印旛沼環境基金

平成16年6月7日発行

〒285-8533 千葉県佐倉市宮小路町12番地

Tel : 043-485-0397 Fax : 043-486-5116

ホームページアドレス <http://village.infoweb.ne.jp/~imbanuma/>

「いんば沼・第25号」